

## III 紹 介 III

## 黄 文雄『文明の自殺』

澤 喜司郎

Kishiro SAWA

## (I)

著者は「従来の『文明論』には、おおよそ『栄枯盛衰』、文明の交流や対話、比較文明論などが多かった。『文明の衝突』は、90年代のハンチントンの著作から論議されるようになったホットな論題で」、「2001年の9-11アメリカ中枢同時多発テロから特に盛んになってきた」「近代西洋文明と非西洋文明の間にあつては、交流や対話があるというより、非西洋文明が西洋文明の周辺文明・衛星文明へと転落、あるいは編入されるのが近現代史の趨勢であることは否定できない。日本の開国維新でいえば、東洋文明から西洋文明に改宗したと呼ばれるほどの『文明』の受容がみられる」が、「日本はつねに洋風と国風、挑戦と応戦を約20年の周期で繰り返してきた。日本はむしろ伝統文化の防衛に必死であり、また事実、日本の近代化はただの西洋化ではない」という。

そして「アヘン戦争後のここ150年間、中国の国是国策、また運動、改革、革命は、ほとんどが自文明を放擲する『文明の自殺』の性格を持っている。しかもそれはきわめて過激にして徹底的だ。たとえば洋務運動（自強運動）、戊戌維新、立憲運動、辛亥革命、五・四運動、社会主義革命、文化大革命、改革開放など、すべてが伝統文明を擲つ『文明の自殺』にはかならない。ではなぜ近代文明史上、西洋文明との出会いの中で、中国はいつでも『文明の自殺』を選び、また目指しているのだろうか。国風と洋風のさなかで揺れ動きつつ、一步一步近代化を成し遂げてきた日本と異なり、中国は一連の改革・運動の中で一気呵成に突き進んできた」からだとし、また中国は「漢民族以外55の民族の伝統

や歴史、民族性そのものを抹消し…文化を殺すことによって自文化を肥大化させている」が、「漢民族の文化そのものも自ら進んで捨て去っている」としている。

なお、本書の章構成は

序章 文明の衝突ではなく文明の自殺だ

1章 改革開放の破綻

2章 中華文明が生む山河崩壊・生存危機

3章 亡党亡国の悪夢

4章 中華帝国の興亡にみる国家の破綻

5章 中華民族の幻想

6章 中華文化の死への行進

7章 中華文明の自殺

終章 中華文明 止まらぬ「死への行進」

であり、本稿では本書の内容を簡単に紹介したい。

## (II)

序章「文明の衝突ではなく文明の自殺だ」では、「宗教戦争はたいてい文明の衝突の側面を持っている。文明のコアは文化であり、文化のコアは宗教だからである。ゆえに異教徒同士の対決はたいてい文明の衝突の性格を持ち、思想的にも文化的にも絶対VS絶対の対決だから、妥協は難しい」が、「トインビーが特に強調しているのは、文明は滅ぼされるのではなく自ら滅びる、ということだった。これは明らかに中国にも当てはまる」「『文明の自殺』とは、文明の擬人的表現である。人間社会の歴史的統合体としての文明は、修復の余地がなければ、自ずと衰亡へ向かう。文明を構成している個々の人間の意識に関わりなく、全体としての文明は死を免れない。中華文明はその文明自体の中に、死

しかもたらさない要因を多分に含んでいる」「猪突猛進を続ける『改革開放』のいきつくところ、そこには中華文明の自殺、文明の崩壊以外の何者をも見出すことはできない」という。

1章「改革開放の破綻」では、「改革開放路線は、たしかに『四つの原則の堅持』『社会主義市場経済』を掲げながらも、じっさいそれは社会主義建設失敗と放棄の宣言にひとしい。それは文革時代を頂点に自力更生の路線を放棄して、いっきょに資本、技術などすべてを外にたよる他力本願の路線に転換したことしか意味しない」とし、改革開放による「経済成長がもたらしたもっとも顕著なものは、格差の拡大だ。国富が1%の党幹部と高級官僚によって独占され、貧富の格差は加速度的に拡大している」「だからそのひずみますます社会的な不安を拡大している。社会の安定と安全を保つためには、プロレタリア独裁はますます強化され、一人の国家指導者が歴代の皇帝以上に党・政・軍の三権を独裁せざるをえない。世界の流れとは逆行して、民意が奪われ、人権がいつそう無視され」、他方で「改革開放後、金銭優先、金銭万能になってからというもの、中国人は金の亡者に成り下がった。ただでさえ低かったモラルはゼロになってしまった」「『自由』を与えられただけで、すぐに『欲望最大、道徳最低』の民族になってしまったのは、それがこの民族の本性だからであろう」としている。

2章「中華文明が生む山河崩壊・生存危機」では、中国は「北京から広州に至るまで秃山だらけの国である。それはまさに中国の『国図』といわれる山水画(墨絵)の景色そのものだが、この国では秃山が自然美の象徴となる」「日本なら鎮守の森といって、神社の多くは森に囲まれている。しかし中国の寺廟は荒土に屹立しているものが断然に多い。じつはこれらは山河崩壊後に見られる独特の景観なのである」「人口と資源、欲望と道徳のバランスが崩れたとき、文化、文明の危機、そして国家、民族の危機が現出する」とし、「改革開放後

の経済の急成長と規模の急拡大により、全国的には国富の増大と経済生活の向上がもたらされたのは事実である。しかしそれはすべての国民に対してではなく、むしろ貧富の格差の増大、失業者の激増、さらに社会治安の悪化など、きわめて大きなひずみをもたらしている。貧富の格差ならまだ是正できるとしても、それ以上に深刻なのが環境破壊の加速化である。それは地上だけにかぎらず、河川、海洋さらに空にまで及んでいる」という。他方「『中華料理』とは、数ある中華文明のシンボルの中で、今日健全にして、かつ世界に普及している唯一のものである」が、「医学的研究では食物の栄養素をもっとも破壊するのは中華料理である。これはただ油っこく、量が多いだけのきわめて原始的で動物的な食文化である」としている。

### (Ⅲ)

3章「亡党亡国の悪夢」では、「90年代の経済的好調の最中でも、経済的格差、政治汚職、凶悪犯罪など、さまざまな体制のひずみが出てきて、党内では『亡党亡国』の危機感が高まっている」「政権にとって唯一の延命策は、情報鎖国を強化して『嘘』を宣伝し、その上で政権と人民の共通の敵を創出し、人民の危機感を煽ること。そのみしか延命を維持する方法はない」「この『嘘』が暴かれ、その人民に対する『犯罪』が明らかになった暁には、政権、国家は必亡する」とし、「社会主義イデオロギーはすでに、社会主義体制が人類に対する万死の大罪を犯したことによって、天罰を受け、民心も喪い、ソ連・東欧などは終焉を迎えた。名を重んじる東亜の儒教文明圏で、社会主義体制の有名無実の状態が守られていても、いつかはそれも必ず終焉の日を迎えるであろうことは、中国人でも知っている」「胡温体制が目下直面している党地方組織の崩壊や社会争乱の激化などは、すべて亡党亡国の現象である。だが胡錦濤がその危機を知りながらも、根本的な解決策を講じようとししないのは、簡単にいえばそれができ

ないからだ」「中国の亡党亡国のカタストロフィは、胡锦涛の予測以上に早く到来するかもしれない」としている。

4章「中華帝国の興亡にみる国家の破綻」では、「中国の文化人は概して中国文化至上主義で、『文化』だけではいつでも世界をリードし、やがて世界の人々は中国の文化に憧れ、中国の文化に同化され、世界は一家、人類みな兄弟の『大同の世界』が必ず到来すると信じ、『中国人が『統一』を人類至高にして至善の価値観とするのは、まさにこの民族の全体主義的志向を示すものである。西洋の価値観が多元的であるなら、中国のそれは一元的である。ここに中国が近代国民国家の国づくり、つまり近代的西洋の価値体系を受容できない根本的かつ本質的な理由がある」とし、「近代国民国家は一民族一国家を理想とするが、それはあくまでも理想であって、多民族国民国家のほうがむしろ一般的である。ところが中国の場合、多民族国民国家の国づくりに躊躇し、多民族をむりやり『大中華民族』として強制統合しようと試みた。それが民族と国家の対立をもたらした原因である。明らかに中国の目指すところは世界帝国なのである」が、「大同世界を求めれば多元性は否定され、異質性の存在は許されなくなる。そうなればごく当然の結果として、思想は硬直化し、文化は異彩を放つことがなくなる」「大同思想はいわば没落の象徴であり、中国人の悲劇であり、それはまた歴史の死への行進なのである」という。

5章「中華民族の幻想」では、中国では「今日に至ってなおも少数民族が存在し」、「それは中華文化や文明の限界を如実に物語るもの」で、「それはこの文明のコアであり、しかも諸族の交信メディアとされた漢字文化の普及の限界」を示すものであるとし、また「中国の少数民族政策は、その言語と文化の絶滅と、中国への同化を目指す政策」で、「多くの少数民族が中国によって絶滅の危機にさらされているなか、最後の抵抗を続けているのが仏教徒のチベット人と、回教徒のウイグ

ル人である」という。他方「漢族の生存空間は明の時代の版図である、いわゆる内中国18省に止まった。これがすなわち中国の伝統的領土とされるが、その後版図が3倍に拡大されたのが清王朝の時代で、それを中華人民共和国が自国領としたため、新たにモンゴル人、ウイグル人、チベット人など多くの辺境民族が『中国の少数民族』に数えられるに至った」とするとともに、「それを正当化する中国の主張は、チベットもウイグルも満蒙も、『古来から中国の絶対不可分な神聖な固有領土だ』というもので、それは「中国人にだけ通用する中国人ならではの暴論である」としている。

#### (M)

6章「中華文化の死への行進」では、「漢字は知識人らが人民を愚民として支配する政治的道具になった。漢字文明圏から大衆文化が生まれてこないのも、そのためである。しかし漢字文明は漢字、漢文の難解度を自己増殖させるなかで、やがてその無限の増殖を支えきれなくなってきた。漢字族の文化創造力も日ごとに喪失していき、異質文明の浸食に対する抵抗力もなくなり、ついには西洋文明圏に編入されてきた」「中国の文明も漢字の死滅によって変質し、漢字文明圏は破綻するに違いない。漢字族が漢字文明の拡散とともに発展し、漢字文明の衰退とともに没落するのも、漢字を交信のメディアとする漢字族の歴史的宿命ではないだろうか」とし、また「中国人が永遠不滅を望むのは民族でも国家でもなく、家族だ。家族こそが自己の生命の継続、延長として考えられ、その弥栄を祖先への祭祀を通じて祈願している」「だが永遠不滅と見られてきた中国の家族制度にも、崩壊の日が近づいてきた。それは人口抑制のための一人っ子政策のためである。一人っ子ともなると、兄弟だけではなく、やがては親族というもの自体が消滅へと向かうのだ。だからといってこの政策をやめれば、中国は人口過剰と資源枯渇によって自滅することになる」「中華文明の終着駅が近づ

いていることは、こういう点からもうかがえる」としている。

7章「中華文明の自殺」では、「世界の諸民族のなかで、中国人ほど尚古主義的な思想を持つ人種はいない」「中国人の思想形成は、自分の経験よりも先人の経験に学ぶことから始まる。このような原始的な形態は今日でも変わっていない」「中国人の尚古主義は、ほとんど病的」で、「中華文明はこの尚古主義の精神によって、没落と衰亡が決定づけられ」、「いかなる民族であれ、中華文明を受け入れると墮落、衰亡していく」とし、また「新しい社会主義精神文化から生まれたものは、『向銭看』（銭ゲバ）や、『すべてがウソ、詐欺師だけが本物』という新文明だけである。中国の社会主義革命では、階級闘争が激化するにつれて、伝統社会やその文化・価値観は実質上崩壊してしまった」ばかりか、「そもそも中国人とは世俗化した民族で、きわめて現実的で実利的、しかも自己中心的で、「中国社会は人間不信の社会である」が、「社会主義社会での階級闘争による『人間改造』で、いっそう人間性が低下し、文明の劣化とともに民族の劣化、凶暴化が進んでいる」「中華文化の中で、今でも世界各地で拡散力を持っているのは、中華料理ぐらいのもので、残りの中華色の強いものはこの地球上から衰亡してしまうだろう」としている。

終章「中華文明 止まらぬ『死への行進』」では、中国は「農耕帝国のあらゆる地上資源を食いつぶしながら北方の中原から南下し、中華世界を拡大する。この反復とは、自然と共生するのではなく寄生するという中華文明特有の現象である」「こうして山河の崩壊は中原から中国全土へと広がり、19世紀から200年来の今、すでに再生不能となっている」「中でも中華世界が直面しているのは、再生不能の山河の崩壊に加え、地上、大気、さらに海洋への汚染の拡大である。それは国土の死への行進であるのみならず、奇病怪病や不妊も幾何級数的に増加している。50年後には環境と食物の汚

染による種の絶滅まで警告されている」とし、「中華文明が自らにもたらすのは過剰繁殖による自家中毒であり、一種の窒息死である。だから中国人は今でも年間100万人単位で世界へ四散している。その『華禍』から世界をどう守るかは、今後の課題の一つである。中華文明の自殺がもたらす地球規模の危機は、これからどうなるのか。それも文明史の課題の一つとして知っていかなくてはならない」という。

#### (V)

著者は、文化と文明について「民族的に特有なものを『文化』と呼び、超民族的で普遍的なものを『文明』として、意識的に使い分けをしている」という。しかし、民族を原単位としてそのエリエ(領域)の違いで文化と文明を規定することには問題がある。一般に、文化(culture)とは「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称をいい、衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容を含む」とされ、文明(civilization)とは「文化的な特徴と現象の集合をいう」とされ、筆者もこのように理解している。その意味では、本書は「文明の自殺」ではなく「文化の自殺」といえ、さらに筆者は中国には伝統的な文化はなく、中国の文化は「文化がないのが文化」であると考えている。

以上、本稿では本書の内容を簡単に紹介してきたが、浅学非才な筆者には的確な紹介ができず、また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり、この点については著者のご海容をお願いする次第である。

(集英社インターナショナル、2007年5月、301頁、定価1,700円+税)